

木育かわら版は宮崎県森林環境税が使われています

CONTENTS

- 第2期モデル園スタートアップ研修 …………… 1
- 木育マイスター研修 …………… 2
- みやざき木育プログラム「森の雫」 …… 3
地域サポーター養成講座&スタートアップ
- 木材産業界と連携した意見交換会 …………… 4

第2期

モデル園スタートアップ研修

日 時:令和5年6月10日(土)10:00~12:00

場 所:ひかりの森こども園(三股町)

参加者:[第2期モデル園]ひかりの森こども園5名、あやめ原こども園9名、
[第1期モデル園]四季の森こども園2名、めぐみ保育園3名 [見学]木材産業界関係者1名

指 導:松井 勅尚 氏(木育実践研究者・元岐阜県立森林文化アカデミー教授)

吉田 理恵 氏(ぎふ木育推進員・岐阜県立森林文化アカデミー非常勤講師)

“みやざき木育プログラム”に取り組み始め4年目となった今年、ひかりの森こども園(三股町)・あやめ原こども園(都城市)の2つの園がモデル園に選ばれ、保育者へのスタートアップ研修が行われました。

木育概論

◆～木と人の命を育むために～

昨年中は宮崎県では台風14号の影響で線状降水帯が発生し大規模災害などありました。世界では森林火災が頻発しています。温暖化による気候変動の影響ですね。

今、温暖化防止が待たなしの状況の中、その大きな原因である脱炭素への取り組みが進められています。

木は木材になっても炭素を固定します。暮らしの中で木を使うことが、炭素を固定し続けることになります。木を植えるだけでなく、そういうことを考える時代になっています。

“みやざき木育”の目指す目的の1つは、「脱炭素社会の実現への貢献」であります。

木育とは、木(森)と人の命を大切にすることを育むことです。

木は地球上の同じ生き物です。その生き物の命を頂いて私たちの暮らしが成り立っています。これは最も重要な問題です。

第2期モデル園では、「地域とつながる力」を大切にしています。

特に、この地域の企業や団体の皆さんとの連携の可能性を模索したいと思っています。

“みやざき木育”のもう一つの大切な目的が「林業・木材産業界を支える多様な担い手の確保・育成」です。

林業・木材産業界は、今や気候変動に立ち向かう最前線の仕事であり、森の命を守る仕事であります。この地域は、そのような生業の方が多くてもモデル園を選定した理由であります。

木でつくることを通して、コロナ渦で希薄になった地域とのつながりをもう一度構築する機会になることを願っています。

◆あやめ原こども園園長あいさつ

これから3年間“みやざき木育プログラム”が始まります。(前モデル園である)めぐみ保育園の取り組みを聞くことができよかったです。これからの取り組みを想像するとワクワクしてきました。

今日の話の「木は生き物」という話は、そこから園児に伝えていきたいと思います。今後進める上で不安も沢山ありますが、ひかりの森こども園と協力して進めていきたいと思っています。



箱の側面に子どもたちの手形を押しました。



あやめ原こども園園長

ひかりの森こども園園長

木育マイスター研修

日時:令和5年6月9日(金)10:00~16:30

場所:宮崎県立総合博物館(宮崎市)

講師:①白石 邦彦 氏(宮崎県山村・木材振興課 みやざきスギ活用推進室)

②赤崎 広志 氏(宮崎県立博物館 副館長)

黒木 秀一 氏(宮崎県立博物館学芸課長)

③松井 勲尚 氏(木育実践研究者・元岐阜県立森林文化アカデミー教授)

④吉田 理恵 氏(ぎふ木育推進員・岐阜県立森林文化アカデミー非常勤講師)

参加者:研修受講者3名 [見学]博物館職員1名、木材産業関係者1名

みやざきの目指す木育を達成するために開発された、幼児期から始める「みやざき木育プログラム」を広く啓発・推進していくために、宮崎県の施策を理解し、木材産業や木材に関する基礎知識と木工道具の安全な使い方を指導できる技術を学び、またそれを木育リーダーや園児に伝えるスキルを養うための研修会を実施しました。

1 治山治水について

最初に、宮崎県山村・木材振興課の白石氏より、治山と治水について学びました。治山とは、森林法に基づいてはげ山、荒廃地を復旧させるため、山地や海岸などの保安林内で行う保安施設整備事業の総称で、森林の機能を発揮させることで生命や財産を守ることです。治水とは、洪水・高潮などの水害や地すべり、土石流、急斜面地崩壊など土砂災害から人間の生命、財産、生活を守るために行う事業のことです。近年は気候変動の影響もあり、大雨などが増え、山地の災害も増えています。宮崎県では、ダムを作る型枠や木柵パネル、緩衝材、暴風垣などに積極的に木材を利用しているということと、写真付きの資料を見ながら説明いただきました。



2 宮崎県の地質と植生

地質学が専門の赤崎氏から、まず、日本列島の成り立ちを聞き、国土交通省から発行されている『土地分類調査』の宮崎県各地の「地形分類図」「表層地質図」「土壌図」の地図を広げ、地図の見方を学びました。

その後、博物館の館内を巡りながら、黒木氏より、「植生」について学びました。植生とは、ある場所に生育する植物の集まりのことです。植生には、代償植生、自然植生と分けられます。植生は、気候や土地、生き物などいろんな影響を受け変化します。その中で、一番影響を与えているのは人間で、自然植生は、人間によって手が加えられていない植生のことです。農耕地や人工林、里山や草原などの植生は、人間の営みで維持されていました。人間の影響がなくなると、自然植生に向けて遷移していきます。宮崎県立博物館では、その森の成り立ちを展示を見ながら学ぶことができます。

宮崎県綾町には、日本最大級の原生的な照葉樹林が残っており、身近で森の成り立ちを見ることができます。



3 木の適材適所

松井先生が準備された木材サンプルを、受講者が針葉樹と広葉樹に振り分け、そのあと、それぞれの材の見方、特徴などを確認しました。

また、針葉樹と広葉樹の構造についてルーペを使い確認しました。

木の特徴などを聞く「何の木テスト」では、今年度のモデル園がある都城市と三股町にまつわるクイズも盛り込まれ、受講者も都城市と三股町の産業などに関心を高めていました。

4 森の雫づくり & 企画書作り

最後に吉田先生が1日の講座の振り返りを行い、「森の雫」を幼児以上を対象とした場合の導入の話をどのようにするか、森の雫を作りながら、受講者で意見を出しました。

5 意見交換 & 感想

「災害の話から保水の話をするのも良いかもしれないと思います。」「自分たちが

“自然”だと思っている風景が、本来の“自然”ではなく、人間の営みによってできている、というのが印象的でした。」「研究者から見ると木の畑にしか見えないというのは驚きです。」

マイスターという「指導者」は単にその場の講座を取りしきるだけの役割ではなく、県の施策や森林や産業の背景など広く知っておく必要があります。また、宮崎県らしいプログラムを新たに企画し実施するスキルも必要になります。受講者自身が既に「担い手」の一人であり、マイスターとなって今後は「担い手育成」の指導者にもなって活躍してくださることを期待しています。

あやめ原こども園 (都城市)

地域サポーター養成講座

研修を始めるにあたり、新川園長先生より「木育活動を通し、地域の方々や企業の方々と連携し繋がりを大切にしたい」と挨拶がありました。その後、県職員から「みやざき木育」についての説明があり、木育マイスター受講者である緒方由紀子さんが講師となりサポーター養成講座を行いました。

「森の雫」が園児と地域サポーターの方にとって最初に体験するプログラムであるため、宮崎県の取り組みと、木育を通して身につけたい6つの力について説明がありました。「森の雫」というプログラムは森と海のつながりを知る内容であることから宮城県気仙沼市で取組まれている「森は海の恋人」運動を例にこの教材の意味や、取り組みの意図についてサポーターとして参集された地域のボランティアに理解と協力をお願いし、子どもたちの作業を見守るコツを伝え実践に繋がりました。



「森の雫」づくり

プログラムは紙芝居の読み聞かせから始まります。園児一人につきサポーターが一人つき、園児に声を掛け園児のやる気を引き出しながら、「森の雫」づくりが行われました。モデル事業ということもあり、地域の木材会社の方も見学に来られ、急遽サポーター役に回って頂けたおかげでマンツーマンの手厚いサポートになりました。園長先生のご挨拶にあった、「地域の方々と企業と連携して取り組む」未来の姿が想像できそうな、スタートアップに相応しい有意義な時間となりました。

振り返り

「地域の方と触れ合うことがなかなかないので、これが続けられれば良いな、と思いました」(保育者)

「子どもたちにとっても多様な大人が関わるのがとても重要だと思います。子どもは未来で地域サポーターは地域の歴史です。」(吉田先生) 「地域の関わりが薄くなってきたところで、もう一度繋がる、一緒にやるというのが大事です。日本は“型”の文化です。その先に自由な表現があります。」(松井先生)

みやざき木育プログラム「森の雫」 地域サポーター養成講座 & スタートアップ

指導：松井 勲尚 氏 (木育実践研究者・元岐阜県立森林文化アカデミー教授)

吉田 理恵 氏 (ぎふ木育推進員・岐阜県立森林文化アカデミー非常勤講師)

日時：令和5年7月5日(水) 9:00~12:00 場所：あやめ原こども園(都城市)

令和5年7月6日(木) 9:00~12:30 場所：ひかりの森こども園(三股町)

実践者：みやざき木育マイスター受講者 緒方 由紀子 さん(あやめ原こども園) / 家村 祐香 さん(ひかりの森こども園)

見学者：都城木青会3名、持永木材(株)2名(あやめ原こども園) / 都城木青会2名(ひかりの森こども園)

木育マイスター受講者の実践として、地域サポーター養成講座とみやざき木育プログラム年少児対象「森の雫」を行いました。

ひかりの森こども園 (三股町)

地域サポーター養成講座

先に実施のあやめ原こども園と同様、園長先生からご挨拶をいただき、県職員より「みやざき木育」についての説明後、サポーター養成講座に入りました。前日に実施されたあやめ原子ども園との違いは、今回はサポーターとして保護者をお願いしたこと(保護者参観)、そして一斉保育スタイルではないことです。それがモデル園として選定された所以でもあります。ひかりの森こども園での講師は、(有)イエムラのCSR活動として木育マイスターを受講している家村祐香さんです。木育を通して学ぶ6つの力を説明しました。

「森の雫」づくり

あやめ原こども園では、全員に一斉に指示を出し作っていくスタイルでしたが、ひかりの森こども園でも園の保育スタイルを大切にするため、テーブルごとのペースで進めることにしました。そのため、講師は各テーブルを周りながら作業工程などを指示していきました。

保育者の感想

「じっくりと木を観察する園児もいて、作るのはどんなものなのか



興味関心が湧いている。作るだけではない関わり方があり、それも木育だなと思いました。」「園児が興味を持てば、きちんとする。年長児になると園児の作りたいという思いに、大人も日常の中で興味を持てるような流れにできればと思っています。」

先生方の感想

「講師(マイスター受講者)にとって初めての現場でしたが、サポーター養成講座と「森の雫」づくりと、突発的な出来事にも落ち着いて臨機応変に対応しており、良い講座だったと感じました。」(吉田先生) 「保護者の皆さんの関心が高いことが印象的でした。『道具は身体の延長である』ことをよく理解し、ご自身も姿勢を意識して制作していただき、吸収力が高いと感じました。」「サポーター養成講座の冒頭での県からの話で『この地域は木材産業が全国トップであること。だからこそ応援者や担い手が必要であること』など、とても熱心に聞いて下さる姿をみて、改めてしっかりと目的を伝えることの大切さを実感しました。」(松井先生)

木材産業界と連携した意見交換会

県木青会意見交換会

※木青会(もくせいかい):宮崎県木材青年会連合会
林業・木材産業界の発展及び人材育成に寄与することを目的とした団体で、素材生産業、製材業、運送業等の林業・木材産業界関係者の将来を担う45歳以下で構成された団体です。

日時:令和5年6月10日(土) 14:00~
場所:県防災庁舎5階 共用会議室51号(宮崎市)
参加者:16名(日南十日会3名、西都木青会2名、都城木青会3名、
宮崎木青会2名、小林十七日会1名、日向木の芽会1名)

「みやざき木育」は、幼少期からの段階的・継続的な木育の実践により、将来、木や森の応援団になること、産業界の後継者になってくれることを願う、長期的な視点に立った取組です。今回、より有意義な木育活動とするため、木育に取り組む林業・木材産業界の代表的な団体である木青会と意見交換を行いました。

各会団の木育取組状況

前年度の各会団の木育取組状況の共有からスタートしました。

(都城木青会)

保育園に旧園舎の廃材を利用したベンチを寄贈しました。仕上げの色塗りを園児にSDGsカラーで塗ってもらい、裏には絵を描いてもらいました。大人が組み立てを行う間に園児には木育の話をしました。多くの人が関わり思い出深い行事になったと思っています。

(西都木青会)

児童館、保育園、小学校などの依頼で、端材を使った木工教室を実施しています。

(小林十七日会)

小学校の図工の授業に協力する形で木工教室や木育の授業を実施しています。また、個人的に中学校からの依頼で、自社の山林を使った造林体験や椎茸の駒打ち体験を行っています。

(宮崎木青会)

緑化運動を推進する団体からの依頼で、夏休み期間に、木に関する講話と木工教室を小学校で実施しています。

(日向木の芽会)

製材工場の端材を使って自由に組み立てる木工教室を、年に1~2回実施しています。木材は加工しやすいということを知ってもらうために、キット化せずにできるだけ端材のまま使ってもらうようにしています。

(日南十日会)

保育園からの依頼で、ウッドデッキや外のフェンスなどを木で作ったり、園児の木の机を磨いたりする取組を行っています。

(松井先生)

目指しているのは、子どもたちのなりたい仕事に「木の仕事」が選択肢となることです。そのためには、子どもたちがその仕事に出会うことがないとあり得ません。木育は手段であります。木や森の仕事は公益です。県と木青会で力を合わせ木育に取り組み、結果としてそれぞれの会社の将来的利益となる、担い手や応援団など人づくりを県と共に推し進めては如何でしょうか？

(吉田先生)

私はNPOとして木育活動に取り組んでいますが、木育教材を開発したり販売した代金を仲間や地域に還元していくことを意識しています。教育でもビジネスでも「信じて待てる」信頼関係があり、初めてお金も含むエネルギーが循環していくと感じています。



感想

(日向木の芽会)

「木の話にしてもいろんな伝え方があると思いますが、個人的に得意分野の川中の説明が欠けていると感じました。」「小中学生や大人に木の特性や使い方など伝えた方が良いのかな、と思っています。」

(日南十日会)

「どう興味をもってもらえるか、なんとか木材に触れさせたいと思っていますが、おこがましくもしたくないので、ざっくばらんに取り組むのも良いのかなと思っています。」

「地元で“ことごと”という施設がありますが、ここで木青会の木材でワークショップを行えると良いなと思いました。」

(宮崎木青会)

「興味がない人いかに振り向いてもらえるかが大事だと思います。」「木工教室を行う際、一番大事にしているのは講話ですが、環境破壊や物を大切に使うというのをどのように伝えれば良いのか難しいです。」

(小林十七日会)

「私の父も木育活動のようなことを行っていました。木工工作や造林体験なども経験し、知識を得ましたが、父や地域の方たちは、どのような願いを込めて行っていたのだろうと考えてしまいました。」

(西都木青会)

「目的を持ってゴールをどこにするのかを考えてやっていかなければいけないと思いました。」「お爺さん世代が植えた木があるおかげで31年スギの生産量1位となっており、あの年代の方達のおかげで今の暮らしがあることを改めて感じました。」

(都城木青会)

「私は木材産業界の担い手を目的に木育をやるべきだと言ってきました。中高生向けの木育を考えないと産業界の応援団に繋がらないと思っています。」「都城ではオリジナルの台本があるが、他の会団も台本を作って県とコラボができればと思いました。」

今回の意見交換では、木育を通して産業界を理解してもらうことの重要性をお互いに共有できました。木育を実施することが目的ではなく木育はあくまでも手段であり、これまで木青会が当たり前のように実施してきた木工教室等について、「なぜ、何のためにするのか深まった」との意見もあり、捉え直す良い機会になったのではないと感じました。今後は、木青会の木育活動とも連携しながら、将来に向けた有意義な取組となるよう進めていきたいと思っています。

木育ネットワーク部会とは

豊かな森林を次世代に引き継いでいくには、県民一人ひとりが、木材の良さや利用することの意義について理解と認識を深め、県民全体で県産材の地産地消に取り組むことが重要であることから、みやざき木づかい県民会議を平成25年2月に設置し、木づかい運動を進めてきました。

木づかい運動を進めるうえでは、子どもたちを中心に木に触れ親しむ機会や、森林、林業、木材、資源循環について分かりやすく伝える機会を創出する木育活動を進めることが非常に大切であることから、木育に積極的に取り組む企業・団体・行政などの参画による木育ネットワーク部会を設置しました。

■発行 宮崎県森林林業協会 ■編集 miyamokku

■事務局 みやざき木づかい県民会議 木育ネットワーク部会(宮崎県森林林業協会・宮崎県山村・木材振興課みやざきスギ活用推進室)

■住所 〒880-0802 宮崎市別府町3番1号 宮崎日赤会館2F ■TEL 0985-27-7682 ■FAX 0985-25-2398



木に触れて、
木と遊び、
木を学ぶ